

樽前arty2015「時間旅行」を振り返って。



本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員 樋泉 綾子

聞き手
—— 門馬 羊次



2016年はアートイベント「樽前arty」がお休みの年です。来年の開催に向け、企画を検討中ですが、その前にいま一度、2015年春の「樽前arty」を振り返ってみましょう。2年ぶりの開催で樽前小学校を舞台にした美術展「時間旅行」が企画されました。廃校ではなく、今も現役で使われている校舎を活用した美術展は、樽前arty+を象徴する表現です。誰もがなじみのある小学校という会場で、どのような展示が生まれたのか。「時間旅行」を企画した本郷新記念札幌彫刻美術館の学芸員、樋泉綾子さんに美術展を振り返ってもらいました。

【時間旅行】

2015年5月3～6日に樽前小学校の教室、体育館、校庭を会場に開催した美術展。出品作家は、石倉美萌菜、北川陽穂、経塚真代、佐竹真紀、進藤冬華、藤沢レオの6氏。

（一樽前小学校での企画展の話は、いつ決まったんですか？）

樋泉さん「2014年に茶廊法邑（札幌）でレオさん（藤沢レオ・樽前arty+代表）の個展を見に行った時に、帰りに呼び止められて。来年、樽前で展示会をするので企画どうですかと。その時にぜひ挑戦してみたいと思って、即答というか、『そういう方向で考えたいです』とお答えしました」

（なぜ即答できたのですか？）

「2011、13年の樽前での展示会を見ていて、すごく場所がいいなと思っていました。私はいつも美術館というハコで企画しているので、別の空間で展示会をやりたいという気持ちもありました。あの土地は、樽前山がいいですよ。山があって海があって、すごく風景が平らで。その平らな感じがいいなと。視界が広くて、札幌から来た私には非日常的な感じがします。下見に来たりすると、いつもいい気持ちで帰っていた。そして、『学校』という場所には、すごく求心力がある。校舎そのものの魅力に作品が加わった時に、双方が引き立て合うような、そういう展示ができればいいなと思っていました」

（一出品作家の人は、どういう考えから？）

「展示会を組み立てる時に、レオさんから言われたのは、よく言うサイトスペシフィックというか、その場所の文脈とか土地の歴史ということを考えてもらわなくていい、美術展として独立したものであればいい、ということでした。私もそうだなと思った。樽前に住んでいるわけではなく、取り立ててこの土地に対する愛着とか知識とかがあるわけでもない。『樽前らしさ』を入れようとする、ウソになるなど。単純に学校という空間の良さを生かせるような展示がしたいなというのと、学校に入った時にすごくノスタルジックな気持ちになるんですが、その懐かしさは、かつて学校に通っていた多くの人が共感できる普遍的な感覚だと思い、過去に引き戻されるその感覚に素直に従って『過去への時間旅行』というテーマを決めました。そこから思い浮かぶ作家を挙げていった。ただ、『あの作家のあんな作品』とこちらがイメージしても、実際には作家が個々にテーマをとらえて新しい試みしてくれるので、こちらの予想を超えていく部分が当然あって、それがおもしろいと思いました」

【一佐竹真紀さんの作品は、過去を記録した写真や動画を素材にした写真アニメーションの手法で、記憶を再生する試みでした。石倉美萌菜さんは、スタンドグラスをイメージしてビニールシートに描き、教室の窓に掲げたカラフルでモザイク的な絵に「これ以上成長するな」などの文言が潜んでいる刺激的な作品】

「ここで展示会をするなら、まず佐竹さんが母校を舞台に制作した映像作品『インターバル』が絶対にマッチすると思っていました。これは10年前の作品ですが、最新作を組み合わせ、時間の流れを示唆しました。黒板に投影し、教室の雰囲気を活かした展示になりました。



それから、『過去への郷愁』をテーマにしつつ、過去っていいことばかりじゃ



ない、思い出したくない嫌な記憶は絶対にあると考えたときに、懐かしいだけではなく、ネガティブな要素も入れたいなと思って、石倉さんに作品をお願いしました。会場が小学校なので、先生に怒られるかなとも思いましたが、色がいっぱい塗ってあるし、紛らわせられるかなと(笑)。石倉さんは、過去の自分のドロドロした『悪い気持ち』を無理にきれいにしなくていい、それも含めて自分だ、ということを表現していると思うんです」

【一経塚真代さんはウサギの帽子をかぶった人形群を教室の中心に据えて、童話の世界観のような一見、愛らしい空間を表現していました。北川陽穂さんは荒涼とした風景を収めた写真を広い体育館の壁に掲示】

「経塚さんの作品は以前、私が勤める美術館で発表しています。ちょうど樽前での展示の話があった頃で、この作品を教室で観ることができたらしいなと思って。イスとりゲームをしている人形の輪の外に1人が立っている。経塚さんの作品は一見可愛らしくて、すごくファンも多いのですが実は暗い(笑)。今回の作品も、ウサギの帽子をかぶった人形の目は隠れていて、表情が分からない。集団生活に馴染めないとか、他人と理解し合えないとか、多感な子供時代の心の痛みを思い起させる作風だと思っています。

石倉さん、経塚さん、佐竹さんの作品は個人的な想いというところに焦点を当てて紹介していますが、もう少し大きい時間、自然の時間の流れを表現する作品があってもいいかなと思って北川さんに声を掛けました。白老の古い体育館や樽



前地区のかつての動物園の跡地を写したそうです。『時間』は北川さん自身も制作のテーマにしている、刻々と過ぎ去っていく時間を写真としてとどめ、可視化する仕事をされています。特定の場や地名にこだわりはなくて、動いている人間と動かない岩や石や木とでは時間の流れ方が違うことに着目し、一緒に写真に写し込むことで、時間の多相性を表現していると理解しています」

【一最後に進藤冬華さんの作品は、リンゴや馬の置物、干したサケなどを並べた少し難解な展示。地元の藤沢レオさんは、樽前小の児童だったころから親しんでいるグラウンドの100年桜の足元に、ピンク色に塗装したいいくつもの木片を直線的に並べていました】

「進藤さんは自身のおばあさんから習って刺しゅうの作品を作ったりしています。だから、世代間の交流とか自分のルーツをたどっていくという時間の流れを想定していたのですが、彼女は今、自分の住んでいる北海道と、東北・サハリンといった周辺の地域をリサーチの対象にしている、青森にも何度か訪れています。今回のテーマを受けて、青森と苦小牧の関係について、交易だとか船の行き来を調べて作品を作っていました。パッと見て意味が分かるというタイプの作品ではないのですが、彼女は造形そのものより、自分が何なのか、どこに立っているのかを探究することに心があって、それをアートという手段で表現している。青森や苦小牧で人に会って聞いた話や、そこにまつわる品物を組み合わせ、自分なりに青森と苦小牧の歴史上のつながりを捉えています。もちろん自分1人が青森と苦小牧について何か包括的なことを言えるわけではなくて、大きな歴史を自分という小さなフィルターを通して外に出しているイメージ。自分が断片的に捉えたことを、どことなく物語を感じさせる佇まいでモチーフを並べて



表現しています。たとえば、馬やウサギの置物に塩の結晶がついたオブジェは、塩がかつて青森と苦小牧の交易品であったことを示唆するもので、結晶も自分で発生させています。

レオさんの作品は外遊びの「蛸壺」から発想したもの。子供時代の遊びにイメージを得たノスタルジックな作品になるのかと思ったら、結果的にはそんなことはなくて。そこがおもしろいと思います。レオさんの作品はいつもシンプルなんです。直線的で人工的で、でも、作品の存在によってぱっと風景が変わる。今回の作品も鑑賞者が移動すると線の見え方が変わっていきます。ストレートに並んでいるように見えたり、斜めに交差して散らばっているように見えたり。視覚の変化がおもしろい。グリッドを作って並べる作業は大変そうでしたが、ごくシ



ンプルでありながら、場を一変させてしまう人の営みの大きさを感じさせてくれました。一本の線を引くことで自分の場所を決める、何もない土地、未開の土地に線を引くことで自分の場所を定めて生活をしていくという、人間の本質的な、原初的な営みについて言及した作品です」

（一学校という場の力は感じましたか？）

「レオさんは分かっていたかも知れないけど、あのタイミング（5月の会期中）で校庭の桜が咲いて、すごいと思いました。レオさんの作品と共鳴してとても美しかった。また、石倉さんのネガティブな作品の横の掲示板に、子供たちが描いた「自分の好きなことと自分の顔」というテーマのポジティブな作品があって、その対比は石倉さん自身も想定していなかった。あの対比があって、より意味が際立ったと思います。佐竹さんの作品は想定してはいたけれど、学校の空間と作品とが申し分なくマッチしていた。ふだん小学校として実際に機能しているので、下見も1回しかできなくて、ほぼ現場での調整なんだけど、黒板や、イス、机な

ど現場にあるモノをうまく使って、各作家が会場を活かして展示していました。それぞれの作品をギャラリーに展示するのは違った魅力が引き出されていた。それは、廃校ではなくて、生きている場なのが大きいいと思います。生きている学校の気配の中に作品があり、だから体験が全体的なものになるというか、ひとつひとつの作品を見たという個別のことではなく、海を見ながら車を走らせて、学校に着いて校庭の桜を見て、廊下を歩いて作品を観て…。展覧会全体が1日の体験になるような感じがしました。美術館だと、ハコとして区切られてしまって、その展示室のなかのみが『展覧会』というパッケージになります。展覧会を観に来たよ、作品を観たよと。また、美術館を出ると日常の空間に戻る。それが美術館の良さでもあります。日常から一步離れた非日常の空間に入っていく、そのための装置として美術館は機能します。作品を観せることに特化した空間で、照明も当たってきれいな空間で集中して作品を鑑賞できる良さはある。でも、今回の展示はそれとは別の感覚というか、廊下を歩くことも、窓の外の木を眺めることも含めての一つの体験になっていたように思います」

（一樽前での美術展を通じて、心境の変化はありましたか？）

「単純なことなんですけど、私はやっぱり美術が好きなんだと分かりました（笑）。もちろん、いつもの仕事も情熱を持って取り組んでいます。今回は仕事以外の時間を使って、休みの日に下見に来たりして。改めて純粋に作家との交流や、それを経て展示会場にセッティングされた作品を観た時のわくわく感とか、そういうことを改めて感じて、やって良かったなと思います」

（一樋泉さんは、これまで客観的な立ち位置で樽前arty+の活動を見ていたかと思いますが、樽前arty+のホームでの美術展に関わり、樽前arty+の今後をどう考えますか？）

「すごく可能性を感じるのは、美術館は基本的には美術に関心のある人が来るのを待っている施設なんです。樽前ではたとえば運動会に出場するとか、いや応なく地域の行事に参加したりするなかで、生まれてきたものがいろいろあるん

だと思います。自然発生的に。生きていくことってそういうことなのかなと思う。自分がこれをしたいからするのではなく、これを求められているから意味わかんないけどやってみるというか。そういうものなのかも知れないと思って。何か高い理念を掲げて、それに向けて邁進するという事は当然大切なんですけど、そうではなく地域の人たちとの関わりの中で、こんなことをしてほしいと要望が出たり。自分たちが考える、自分たちがこれを打ち出す、というのではなく、周囲からの要望で自分たちが思いつかなかった表現が出てくるのかもしれないと思いました。美術館、ギャラリーであれば、美術至上主義に立って、作家・作品を守りますという考え方になるところを、そうじゃなくて美術なんてどうでもいいと思う人が活動に入ってくることで、美術側の反省とか新しい発見とか出てくるような気がしましたね。美術の側の人たちってとんがった新しい表現を追求していかなければいけないという感覚があるだろうけど、別に『畑耕す方が楽しい』となってもいいと思うんですよ。そういう視野の広がりや、相互にあるんじゃないかと。農家の方が絵を描こうと思ってもいいし、美術の人が農業しようとなってもいい。違う価値観に常に触れられる接点があるところが樽前arty+の大きな特長だと思います」

(樋泉 綾子)



樋泉 綾子

本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員。札幌芸術の森美術館学芸員を経て2012年より現職。北海道のコンテンポラリーアートを幅広く観察し、時代性を反映した意欲的な展覧会を企画する。

石倉美萌菜

札幌市在住。2008年CAI現代芸術研究所夜間講座卒業。2009年大谷短期大学美術科油彩コース卒業。自身の個人的な感情や葛藤、他者や自己を取り巻く世界とのあいだに生じる違和感に向き合い、絵画や立体、パフォーマンスなどさまざまな手法を試みながらそれらを表現している。

北川 陽稔

札幌市および東京都在住。ランドスケープや人物をモチーフに、時の多層性を可視化する写真やビデオ作品を制作。sprawl Inc. 代表として、ミュージックビデオやCM等の演出・撮影も手がけている。

経塚 真代

札幌市在住。札幌大谷短期大学美術科油彩コース専攻科卒業。CAI現代芸術研究所11期生。木粉粘土で造形し、アクリル絵具や岩絵具で着色した独自の少女像を制作。自身の心の奥底に横たわるさまざまな感情を、物憂げでアンバランスな体型の少女たちに託して表現している。ギャラリー・美術館等での個展やグループ展、雑貨店等での作品販売など、精力的に活動している。

佐竹 真紀

札幌市在住。2005年北海道教育大学大学院修了。「記録」と「記憶」の狭間にある世界を探究すべく、写真を使ったアニメーションを中心に制作。作家自身が撮影した映像と、家族の手による彼女の幼い頃の写真やホームビデオの映像を組み合わせた独自の手法で、実験的でありながらも普遍的な共感を呼ぶ作品世界を展開している。

進藤 冬華

江別市在住。2000年北海道教育大学札幌校芸術文化課程美術・工芸コース卒業。2004～2006年University of Ulster, Master of Fine Art (ベルファスト、北アイルランド)に留学。北海道やサハリン、東北などの伝統的な手芸、裁縫の技法や材料を取り入れたテキスタイル作品を中心に制作。

PONARTY

樽前arty2015「時間旅行」を振り返って。 樋泉 綾子

(聞き手 門馬 羊次)

住 所 / 苫小牧市字樽前 114

ホームページ / tarumae.com

発 行 日 / 平成 28 年 11 月

発 行 所 / NPO 法人樽前 arty プラス

発行責任者 / 藤沢 レオ

装 丁 / 堀米 和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。